

# モンゴル帝国と火薬兵器—明治と現代の「元寇」イメージ—

向正樹 mmukai@mail.doshisha.ac.jp

## 1. 様変わりしたモンゴルのイメージ

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作<sup>1</sup>やメディア<sup>2</sup>を通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。多元社会を治める柔軟性と経営マインドに富んだ統治集団としての新しいモンゴル像が、世界に破滅をもたらした征服者としてのステレオタイプと取って代わる。モンゴル人第一主義、九儒十丐、ラマ教の狂信といった古色蒼然たる旧説は痛烈に批判された。

では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家矢田一嘯(1859–1913)のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の中国の観光地のパノラマ展示や日本の漫画での描写を比較してみたい。

### 矢田一嘯と元寇記念碑運動

矢田一嘯は明治期に活躍した洋画家で、歴史を題材としたパノラマ画を数多く残した人物である。安政5年(1858)横浜に生まれ、日本画を学んだのち洋画を学び、明治15年(1882)頃にアメリカやヨーロッパに渡り、帰国後、上野パノラマ館に戊辰戦争のパノラマ画を描き注目を浴びた。

パノラマ館とは、円筒形の建物内部に大画面を巡らせた見世物施設である。1794年にロンドンで生まれ、ヨーロッパ、アメリカに広がった。矢田も海外滞在中にそれらを目の当たりにしたと考えられる。明治23年(1890)に開業した上野パノラマ館は日本最初のもので、浅草・大阪・京都・熊本・富山にも建造された。

矢田はその後、熊本に九州初のパノラマ館ができたとき、そこに西南戦争のパノラマ画を描いて活躍した。明治27年(1894)、福岡に移ると、博多に元寇記念碑を建設する運動に賛同し、そのために元寇を題材とした一連のパノラマ画を描いた。元寇記念碑の建設された東公園には、それらを展示するため、元寇記念パノラマ館もつくられた<sup>3</sup>。矢田はまた解剖

---

<sup>1</sup> 杉山正明『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国—』(角川選書227), 角川書店, 1992; 『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道—』(朝日選書525), 朝日新聞社, 1995; 『モンゴル帝国の興亡』講談社, 1996。

<sup>2</sup> NHKスペシャル「大モンゴル」(1992年放送)など。

<sup>3</sup> 後述の佐野前勗上人によって銅像前の広場に建てられたが、大正中期に大暴風雨によっ

学の知識を生かして博多人形の育成にも尽力し、そして、大正2年(1913)に没している<sup>4</sup>。

図8 矢田一嘯 蒙古襲来絵図 「博多上陸」 本佛寺



#### 元軍イメージの変遷—明治・現代日本と中国—

矢田のパノラマ画には元軍の際立った特徴のひとつである火薬兵器の使用がしっかりと描かれている(図8)。有名な「蒙古襲来絵詞」(文末図版⑤)に描かれた博多に上陸した元軍との戦闘シーンに想像力を加えて立体感を出した構図となっている。上述の湯地丈雄・高橋熊太郎『元寇』にも「てつはう」が炸裂する「蒙古襲来絵詞」の挿絵が描かれるほか<sup>5</sup>、次のように記しており、あきらかに火薬兵器に特別な注意が向けられていた。

元の軍勢はすでに中央亜細亜地方に於て、百戦を経たる雄将猛卒にして、其の指揮の整い進退の駆引自由自在なる、戦場の法口べて我が国人の意外に出でたりける、殊に毒矢を射かけ、火矢を放ち、鉄砲を打ちかくる、其の音空に鳴り渡りて雷の如くひびきわたり、之にふるるものはいかに勇猛なりといえども直に命を落としけり...<sup>6</sup>

---

て倒壊した。太田弘毅編著『元寇役の回顧—記念碑建設史料—』錦正社, 2009, p. 164.

<sup>4</sup> 以上, 太田, 2009 および西本匡伸編『よみがえる明治絵画—修復された矢田一嘯「蒙古襲来絵図」—』福岡県立博物館, 2005,より。

<sup>5</sup> 湯地・高橋, 1893, p. 69.

<sup>6</sup> 湯地・高橋, 1893, p. 64.

今日、モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、さらに先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は、その時代に存在したことが完全には証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれる例もある。例えば、近年、たかぎ七彦の漫画『アンゴルモア 元寇合戦記』では、後述のようにクビライ時代には存在が確認されていないはずの金属管形火器が登場する<sup>7</sup>(図9)。氏の作品は綿密な調査に基づく斬新な描写を特徴とする。例えば、唐が鮮卑系王朝であり、唐皇帝が「天可汗」として世界に君臨したとか<sup>8</sup>、モンゴル帝国を「ウルス」と記述するのは<sup>9</sup>、近年の研究動向を踏まえたものとみられる。モンゴル人登場人物のセリフや軍旗に、パクパ文字、ウイグル文字モンゴル語が多用され、異国感を表現しているのが印象的である。これに対し、矢田一嘯のパノラマ画では元軍の旗は基本的に漢字で「右軍」「東路」「大元水師」などであった。モンゴル側の人物を描く際、ときにかねらの価値観の独自性を表現しつつも、共感可能な人間的な側面も同時に際立たせているのは、グローバル世界の多様性を反映した、極めて現代的な表現感覚であるといえよう。

最近、中国大陸の例で、興味深いのは、広東省江門市新会区にある宋元崖門海戦文化遊覧区である。1276年、崖門に行宮を置いていた南宋の幼主趙昀(端宗)を元が海戦のすえ滅ぼしたのにちなみ、行宮が置かれた場所に作られたテーマパークである。南宋側の視点で作られている。園の最奥部には、楊太后を祭った慈元廟、文天祥・陸秀夫・張世傑を祭った大忠祠、宋軍の兵士を祭った義士祠の三つの真新しい廟宇が並び立つ。その建造の資金を香港・マカオの住民のほかアメリカ在住の華僑が出している。対モンゴル戦争の記憶が、遙かな遠隔の地にあつて当地出身の人々のアイデンティティの核となっている様が興味深い。

園内の建物のひとつには、最近描かれたとみられる南宋と元の戦いを描いたパノラマ画が展示されている。そのなかの一枚には元軍が大口径の大砲を発射する絵がある。また、入口付近の建物で、海戦の様子を描いた再現CG映像がスクリーンに流れていたが、その映像中にも元の艦隊が大砲を一斉射撃するさまが描かれていた。園内の展示によれば、元軍が大砲を使用したことを含め、海戦の詳細を描くという地方文献のコピーが展示されていた。たしかにそこには「砲」を使用したとの記述がある。しかし、この「砲」が何を指すのか、実は難しい問題なのである。

## 2. マンジャニークと火薬兵器——軍事技術の東西交流

---

<sup>7</sup> たかぎ七彦『アンゴルモア 元寇合戦記』第4巻、角川書店、2015、pp. 37-38.

<sup>8</sup> 同上、第5巻、2016、p. 106。唐＝「鮮卑系王朝」説や唐太宗の「天可汗」称号については森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社、2007、p. 138、164参照。

<sup>9</sup> 同上、第1巻、2015、p. 54。

火薬兵器が世界史において果たした役割については、つとに多くの議論がある。15世紀以降のヨーロッパ人のアジアや新大陸進出の前提条件として、造船技術、航海技術とならび火薬兵器の改良が挙げられる。またそれ以前の時代に幾度もユーラシアの歴史を大きく動かしてきた騎馬遊牧民の勢力が定住農耕民社会の帝国に対して劣勢に置かれた一要因としても、後者による火薬兵器の導入が挙げられる。しかし、もっとも早く火薬兵器の開発を進めてきたのは中国王朝であった<sup>10</sup>。しかもそれを戦争に本格的に導入したのは北方騎馬遊牧民系の政権であった。

ユーラシア東西に跨る史上最大の帝国をうち立てたモンゴル—その最大の武器は、騎馬遊牧民ならではの組織力と機動力であった。しかし、特に中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程では、堅固な城壁に囲まれた都市の攻略が必要となり、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された<sup>11</sup>。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地の様々な技術(と技術者集団)を吸収していったことが知られる<sup>12</sup>。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

モンゴル帝国が征服戦争の過程で、イランで改良されたカタパルト式投石器マンジャニーク(文末図版⑤)のような攻城兵器など、新しい軍事技術の導入に積極的であったことはよく知られている<sup>13</sup>。マンジャニークはもともとの意味は投石機である。いかにより大きな巨石を飛ばし、ユーラシア大陸の都市に一般的な堅固な城壁を破壊するか、を主たる使用目的としている。『集史』には、1258年のフレグ軍によるバグダード攻めの際、周辺の山から石をあつめ投石機で飛ばし城壁に穴をあけた記述がある。巨石を飛ばせるマンジャニークがバグダード陥落の決め手であった。

ところが、実はこの戦役に火薬兵器が使用された事実も無視できない。しかも『集史』によればそれは中国由来のものであった。『集史』フレグ・ハン紀によると、1251年、第4代

---

<sup>10</sup> Jerry H. Bentley, *Old World Encounters: Cross-cultural Contacts and Exchanges in Pre-modern Times*, Oxford University Press, 1993, pp. 181-184; Needham, Joseph. *Science & Civilization in China*, Vol. 5: Chemistry and Chemical Technology, Part 7: Military Technology: the gunpowder epic. New York: Cambridge University Press, 1986; テンプル, ロバート著, ジョセフ・ニーダム序文, 牛山照代訳『図説 中国の科学と文明』河出書房新社, 1992, 改訂版 2006, pp. 380-387 (原著 Robert Temple (Foreword by Joseph Needham), *The Genius of China: 3000 Years of Science, Discovery & Invention*, Patrick Stephens Ltd., 1986; Carlton Publishing House, 2006).

<sup>11</sup> 蕭啓慶「蒙元水軍之興起与蒙宋戦争」『漢学研究』第8巻第2期(16号), 1990, 177-200; 向正樹「蒲寿庚軍事集団とモンゴル海上勢力の台頭」『東洋学』89(3), 2007, pp. 80-82.

<sup>12</sup> 松田孝一「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」『平成12~13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(研究代表者: 松田孝一; 課題番号: 12410096), 2002, pp. 171-200.

<sup>13</sup> 杉山, 1992, p. 237; 1995, p. 177

皇帝モンケが、弟フレグにバグダード遠征を命じたさい、中国から三種類の兵器を扱う技師 1000 名を派遣させている。それらは扱う兵器の種類によって Manjanīqī, Naftandaz, Charkhandaz とペルシャ語で記されている<sup>14</sup>。それぞれ、ペルシャ語で「Manjanīq を扱う者」, 「Naft を投射するもの」, 「Charkh を投射するもの」を意味する。Manjanīq は先述のマングニークであり, Naft はもともとは石油を意味する語であるが火薬の意味もある, Charkh は火箭(所謂ロケット)のようなものであろう。従来これらは, 「石・石油・槍を投射する...」とか「砲手・火炎放射手・弩手」とか解されている。

モンゴル帝国時代の用例については, Naft を石油と解するのが一般的である。それはアラビア語やペルシャ語の話される世界においては正しい判断かもしれないが, 石油におとらず火薬が兵器として使用された中国にもその用例は通じるかどうかは大いに再考の余地がある。例えば, イブン=バットゥータ旅行記に, 中国ジャンクの搭乗者として Naft を投げる兵についての記述がある。旅行記の訳注を行った家島彦一氏は Naft について「石を綿でつつみ石油を浸して点火し...」という推定して述べている<sup>15</sup>。しかし, Naft という語はのちに火薬の意味ももつようになる。イブン=バットゥータの旅行記は中国ジャンクについて語っているのであり, しかもイブン=バットゥータよりも 70 年も前に「てつほう」が存在していることから, Naft を火薬と解する方が正しいと考えられる。

また, バグダード包囲戦のとき, 脱出しようとした敵軍への砲撃でブカテムルという将軍が率いる軍が“qawārīr naft”を使う記事がある<sup>16</sup>。Qawārīr とは, ペルシャ語で「フラスコ」や「瓶」を意味し, アラビア語 qārūra(t)(意味は「ガラス瓶, くすりの瓶」)の複数形 qawārīr に由来する。「ナフトを何か割れやすい容器に詰めたもの」だろう。もし naft が火薬なら, 内モンゴルの九州で出土している陶製の火薬玉だろう(文末図版③)。この火薬玉が旧金朝の華北出身の漢人部隊の武器であるなら, 『金史』にみえる「震天雷」に近いものとみられる。つまり, バグダード陥落の決め手はあくまでも投石機であったが, 「震天雷」に類する火薬兵器も同様に活躍したということである。

1268 から 1273 年までのモンゴルによる襄陽攻撃の際, 大元ウルスの遠征軍首脳の一部ウイグル人将軍エリクカヤが西域のような強力な投石機があればと考え, 皇帝クビライがイルカン国(フレグ家)当主アバカに依頼し阿老瓦丁(アラー・ウッディーン)と亦思馬因(イスマール)が大元ウルスに派遣され<sup>17</sup>, 襄陽の城壁を破壊した。

<sup>14</sup> コンスタンティン・ムラジャ・ドーソン著, 佐口透訳注『モンゴル帝国史』4(東洋文庫 235)平凡社, 1973, p. 138; 拉施特主編, 余大鈞訳『史集』第 3 卷(漢訳世界学術名著叢書)北京: 商務印書館, 1997, p. 138; Фазлаллах Рашид ад-Дин, *Джәми‘ ат-таварих: критический текст А.А. Али-Заде*, Москва: Изд-во Наука, 1965, Persian text, p. 22.

<sup>15</sup> イブン=バットゥータ著, イブン=ジュザイ編, 家島彦一訳注『大旅行記』(東洋文庫 691)第 6 卷, 平凡社, 2001, p. 128; 184, 注 163.

<sup>16</sup> Фазлаллах Рашид ад-Дин, 1965, Persian text, p. 57.

<sup>17</sup> 『元史』卷 128, 阿里海牙伝, p. 3125 (中華書局); 同卷 203, 工芸伝, 亦思馬因, p. 4544 「亦思馬因, 回回氏, 西域旭烈人也。善造砲, 至元八年與阿老瓦丁至京師。十年, 從國兵攻襄陽未下, 亦思馬因相地勢, 置砲于城東南隅, ...」; 蘇天爵『元朝名臣事略』卷 2, 丞相楚国武定

中国には火薬兵器の震天雷があったが、マンジャニークほど強力な投石機がなかった。逆に西にはマンジャニークはあったが火薬の弾丸をそれで飛ばすという発想がなかった。それぞれの足りない部分を補うように融通させた柔軟さと構想力こそが、ユーラシア世界帝国を築いたモンゴルの真骨頂といえることができる。

### 3. 二種類の火薬兵器と「砲」のジレンマ

モンゴル帝国(元朝)の時代は早くから火薬兵器を発達させ使用してきた中国においても、おそらくそれが戦争に広範囲に投入されたという点で画期に当たる時代とみられる。この時期の火薬兵器使用についての記述は、漢文文献のなかにおそらく豊富にある。しかし、それがどのような形態のものだったのか特定するのは難しい。その時代のもものと認定される火薬兵器の実物には、以下に述べるように陶製爆弾と金属管形射撃性火器の二種類があること、その組み合わせが幾通りか考えられること、これらを指す漢語がはっきりしないこと、などの問題があるからである。

漢語において古くから火薬兵器を指す文字として「砲」(やのちに「炮」)が使用されてきた。「砲」は本来「礮」と書かれ、巨石を投じる機械を指し、火薬兵器登場以前の『後漢書』袁紹伝に用例がある。石へんが意味を表し、つくりの「包」が音を表す(一説には轟音を表現するという)。これがおそらくは金～元にかけての時期に火薬兵器を指す字となった。博多湾や伊万里湾で実物も発掘されている火薬兵器の「てつほう」の漢語表記もそれであろう。ところが、同時にこの時期には先述の投石機マンジャニークが「回回砲」と呼ばれていた。そのため、個々の用例で「砲」がどちらを指すのか、にわかには判然としない。しかし、考古発掘の成果を踏まえつつ、文献の用例を子細に分析することで見えてくることもある。そこで以下にいくつかの仮説的考察を加えてみたい。

#### a. 陶製爆弾

「てつほう」とは、直径 15 センチ、陶製の球形の器に火薬を詰め爆裂されたものである。1281 年の日本遠征の際、4 千隻のモンゴル軍船が沈んだとされる長崎県松浦市鷹島沖海底からは、冑や矢束など多くの遺物とともに「てつほう」が発見された。海底からの遺物は外部を覆う貝殻のせいで形状を判別しがたいことが多く、また、金属遺物は錆と貝殻が厚く固着し、元の形状を探るために、三次元立体像を高速・高出力で撮影できる X 線 CT スキャナーが活用されている。鷹島からは内容物が残る「てつほう」も見つかり、X 線 CT 調査によると、内部に短冊状に割った鉄片、陶器片様のものが詰められていることが確認された。鉄片には気泡があり鑄鉄が使用されていることが判明する。これらが火薬の爆裂と同時に破碎・飛散して強い殺傷能力を実現していたと考えられるという。口付近には繊維質の痕跡が

みられ、導火線あるいは有機物の内蓋があったと考えられている<sup>18</sup>。

日本遠征に「てつほう」を投入した皇帝クビライの時代、元軍が火器部隊を活用した記述は少なくない。漢人将軍の張榮の子君佐は南宋平定戦で、「火砲」を使用しているし<sup>19</sup>、先述のナヤンの乱でも、大元ウルス軍の李庭が決死隊に「火砲」をもたせて夜襲をかけ自爆し、敵を大混乱に陥れる記事がある<sup>20</sup>。また、大元ウルスが南宋の残党を滅ぼした崖山の戦いで、南宋の艦隊に対し、「砲」を用いる策が検討されていたという記述がある。この提案に対し、「砲」を用いても「火起れば則ち舟散ず。戦うに如かず。」という反対意見があったことが記されている。それに続く戦闘のシーンでは、「弧弩火石交作」したと描写され、海戦での火器の使用を裏付ける<sup>21</sup>。

## b. 金属管形射撃性火器

さらに、驚くべきことに、近現代の銃や大砲の祖形とみられる金属管形の射撃性火器までもが、モンゴル帝国軍によって広く用いられていた。中国の学界では「火銃」などと書かれる銅製・鉄製のこうした兵器は、宋代の竹筒を用いた「火筒」のようなものから派生して中国で独自の発展を遂げ、明代に広範に用いられていたことが従来知られていた<sup>22</sup>。だが、現在中国にはすでにおそらく 10 をゆうに超える数の「火銃」が元代のものと推定され、博物館などに展示・収蔵されている。近年、内蒙古蒙元文化博物館が収蔵するパクパ文字で大徳 2 (1298)年の銘が刻まれた全長 34.7 センチ、口径 10 センチの銅火銃が本物と認定され(文末図版①)<sup>23</sup>、これまで紀年をもつもののなかで最古のものとされていた中国国家博物館蔵の至順 3 (1332)年の紀年の銅火銃に代わり最古のものとなった。

この銅火銃は大元ウルスの上都遺跡周辺の牧民の家で発見されたという。おそらくは上都守備隊のものと推定される。大徳 2 年というと、クビライ政権末期に帝国を揺るがしたチンギスの弟の一族であるナヤン、カダアンの反乱が収束してから 6 年後であり、大元ウルスはまだ東部モンゴリア方面への警戒を解くことができず、火器部隊を配置し睨みを利かせていた可能性もあろう。

## c. 船上での火薬兵器使用？

1984 年、中国山東省登州港の蓬萊水城で三艘の古船が出土した。その中の一艘は残長が 28.6 メートル、残幅 5.6 メートルであり、全長 32.2 メートル、幅 6 メートルの中規模戦船で

<sup>18</sup> 今津節生「4. 長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土品の X 線 CT 調査」『蒙古襲来，元の軍船からみえてくるもの』（鷹島神崎遺跡国史跡指定記念シンポジウム要旨集），2013, pp. 287-300.

<sup>19</sup> 『元史』卷 151, 張榮伝, p. 3582.

<sup>20</sup> 『元史』卷 162, 李庭伝, p. 3798.

<sup>21</sup> 『元朝名臣事略』卷 6, 元帥張獻武王, 中華書局本, p. 106.

<sup>22</sup> 劉旭『中国古代火薬火器史』鄭州, 大象出版社, 2004, p. 31,53.

<sup>23</sup> 鐘少異, 齊木徳・道爾吉, 硯鴻, 王兆春, 楊泓「内蒙古新發現元代銅火銃及其意義」『文物』2004 年 11 月(総第 582 号), pp.65-67+3plates.

あるとみられ、元代末期か明初のころのものと推定されている。この古船とともに、石弾、「銅砲」、「鉄砲」が出土したという<sup>24</sup>。火銃を使用した海戦が想定されていたとすると、火器を装備した軍船が中国に現れていたことを示唆する驚愕すべき例である。

## おわりに

以上、火薬兵器を中心として、日本におけるモンゴル帝国像の変化、そして、軍事技術からみたモンゴル時代のユーラシア交流について、見てきた。モンゴル帝国の火薬兵器使用の技術史的な考証も重要ではあるが、本稿で注目したいのは、明治と現代日本の元寇イメージの対比において、火薬兵器がひとつの鍵となるのではないか、という点であった。

湯地丈雄らは、『元寇』結論において、中央アジアの地、トルキスタンなどがチンギスカンの脚下に屈したのは、忠臣義士がいなかったのではなく、「愛国の心」が足りなかったのであると、「我が大日本帝国の人民」は時宗の英断や諸将の胆勇だけでなく、「愛国の心」がなければ、強敵を挫き、わが帝国の威武を海外に輝かし、日本男児の勇気を世界に示すことはなかったであろう、と述べている<sup>25</sup>。また、湯地は矢田一嘯の元寇大油絵の画集に付した序に、日清戦争後の明治30年(1897)、当時の情勢を、「宇内の形勢東洋の危機、益々迫るの秋」とし「今や平和親睦なりと雖も、戦後の警戒、又前日に倍するものあり」と認識していた<sup>26</sup>。その背景には、日露戦争を控え、欧米列強に対抗しつつ国家の生存戦略を立てなくてはならなかった明治の日本が置かれた状況が色濃く反映されている。これはまた今日われわれが置かれている状況ともどこか似かよう。

ユーラシア東方に史上屈指の衝撃をもたらしたモンゴル襲来の記憶は、漫画から、TVドラマ、映画など表現の場が広がっていくなかで、今後、どのようなインスピレーションを人々に与え続けるのだろうか。日本をとりまく極東情勢が不透明さを増すなか、中国の経済大国化や海洋進出は話題となりやすい。世界史的に見れば、中国シーパワーの拡大は、明の鄭和から実に600年ぶりの現象である。外洋艦隊の運用という意味では、「鄭和による大航海はモンゴル帝国の海洋政策の続きである」といわれる<sup>27</sup>。鄭和の大航海のときには日本列島は巻き込まれていないが、モンゴル襲来のときには対馬や博多などが戦場となった。漫画『アンゴルモア』で描かれるハイテクの象徴としての火薬兵器は、およそ730年ぶりに先進的な軍事大国として海上に台頭する隣国への畏怖のシンボルなのであり、人々の不安な心理を代弁している、というのは考えすぎだろうか。

<sup>24</sup> 席龍飛『中国造船史』武漢：湖北教育出版社，2000，p. 210；山東省文物考古研究所，煙台市博物館，蓬萊市文物局『蓬萊古船』北京：文物出版社，2006：彩図20，41，図版4。

<sup>25</sup> 太田，2009，p. 106。

<sup>26</sup> 太田，2009，p. 128。

<sup>27</sup> 『新編高等世界史 B 最新版』帝国書院，2002，p. 147。

矢田一嘯のパノラマ画においては、残虐性が誇張されて描かれ、モンゴル襲来の恐怖にみちたイメージが形作られていた。しかし、『アンゴルモア』で、元軍兵士の戦利品の奪い合いなど醜い面が描かれることはあっても、それは日本側の登場人物の裏切りや悪逆非道な行為などよりもひどく扱われているわけではない(そもそもこの作品には、湯地・矢田のような愛国的なテーマが与えられているわけではない)。火薬兵器の描写についても、宋元崖門古戦場の再現CGに比べれば控えめですらある。しかし、敵対する他者は、(その非道性を強調することで自己と区別され、それとして認識される以外に) 実際よりも強大な力をもつかのように描かれる傾向があるのも常である。日本・ヨーロッパ・イスラーム史料におけるモンゴル軍イメージをはじめ古今東西の歴史記録にそうした例は数知れない、イラクの旧フセイン政権の核疑惑もそうした面をもつだろう。モンゴル軍の恐怖イメージは、紋切り型の誇張表現がリアリティを持たなくなっただけで、新型火薬兵器によってしか成立しえないといえるのではないか。

## 文末図版



①



②



③

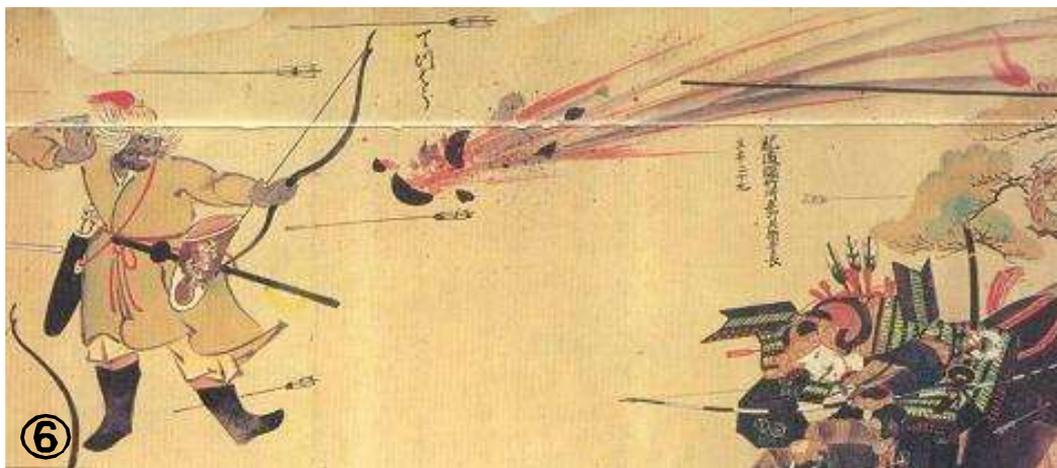
①②大徳年間製造のパクパ文字銘文のある銅火銃 ③元代のものらしい銅火銃  
 ④しつ藜(陶製爆弾) ⑤ミニアチュールに描かれたマンジャニーク(投石器)  
 ⑥蒙古襲来絵詞に描かれた元軍の「てつはう」※①～④は蒙元文化博物館蔵



④



⑤



⑥